

4.4. 「記録」作り

「書展」の作品を日本に発送した翌週の日曜日に、かねて計画していたスペインへの休暇旅行に出た。「書展」の余韻をじっくり楽しもうと計画した休暇だった。準備の一年間、オープニングの実演とパーティ、と思い出を一杯かかえてマドリッドに着いた。ホテルに荷を下ろして散歩に出た公園から外に出た地下道で災難に遭うことになった。二人組みのひたたくりに襲われ、所持品を奪われた上、首を絞められた際に声帯を傷めた。「思い出」に埋没していて周囲への注意を怠っていたのは明瞭だった¹。

その前日の土曜日、国連近くの「すしバー」で昼食をしていたら、見知らぬ婦人が二人近づいてきた。「お前、Calligraphyをやった人だろう、素晴らしかった。楽しかった。特に四文字（和敬清寂）が良かった、少し離れて見るとパワーを感じた、どういう意味なのか」と言う。アメリカ人の様だった。嬉しかった、ここにも見てくれた人がいた、わかってくれた人がいたと。他にも、「イラスト入り(13番)」が良いと言ってくれた日本人、「露」を自分にも書いて欲しいと言ってきたオランダ人、変化のある色の墨が面白いと話し掛けて来た地元のオーストリア人、また、初日にもらった色紙にお礼のe-mailをよこした人等、事後の反響も少なからずあった。直後の展示だった油絵展よりずっと良かったなど、多少外交辞令的かと思える賛辞をくれた職員もいた。スペインから帰って再開したドイツ語教室では「実演には観客も参加出来たのか、私もやりかった」と生徒の一人（アルゼンチン）が悔しがっていた。

書展の「記録」作成は早い時期から決めていた。構想そのものは会期中に麗泉の合意を得ていた。具体的なプランはオープニングの写真が現像されてきた二月半ばからだだった。彼女からも借りたネガと合わせて約200枚の写真が主な素材だった。写真はスキャンして電子本にする構想だったが、技術不足で結局は「貼り込み」作業になった。準備期間中のちらしや職場誌への投稿記事、スピーチクラブでの話なども大事な材料だった。彼女に表紙と「結び」の文を依頼した。表紙には彼女得意のイラストを入れてくれるよう頼んだ。

幸運なことに「書展」の興奮がまだ消えない四月半ばに北京で公務があった。その公務終了後、琉璃廠で「書」の小道具を求めてから²かねて訪ねたかった西安、敦煌へ飛んだ。中国国内の旅行は公務相手の精華大学の教授が手配してくれた。家内が西安で日本から合流した。最終目的地は敦煌だが、中継点の西安で「書」を楽しむのも大きな楽しみだった。先ず碑林博物館で時間をとった。見ていて飽きなかった。本でしか知らない顔真卿や懷素といった名筆家の字を碑の形であるが直接目にして感激した。よくも書いたり、よくも彫ったりである。そこで購入した拓本が今も居間で目を楽しませてくれる。大雁塔では「大唐三蔵聖教序」碑文の実物を目にした。ちょ遂良の字である。寺子屋で苦労した臨書を思い出していた。「書展」の感動が蘇ってきた。

「記録」の骨格案ができたのは五月。麗泉手書きの表紙は七月始めに手元に届いた。一方でドイツ語教室の先生から、「次号の語学教室 Journal に展示会の話を書かないか」と勧められ、経緯と初日の状況、国連への寄付等を中心に書いた。校正してもらった記事は七月始めの期報に出た。麗泉の「和敬清寂」と私の「露」の写真を挿入した。この作品が「記録」に編入する最後の材料だった。「記録」は本文と別冊の二分冊とすることにした。麗泉と自分用の二部だけの極め付き限定本である。あとは製本するだけだった。

¹ この事件については別項に記した。取られた品物は後刻全品戻ってきた。ただし現金で手違いがあった。朝、空港での換金額から使った分を差し引いて67000Ptsと申告。現物は57000Pts。警官は二人組から回収した財布から埋め合わせてくれた。「一部だけ不足とはおかしいな」とは思っていたら私の勘違いだった。貰い過ぎた10000Ptsを翌日返還に行ったら、「もう処理済」と面倒そうな表情をしていた。

² 墨、筆架等と共に、麗泉への手土産として自分の思い出と合わせて落款用の印材を求めた。

製本方式は事前に別の材料で試行済みだった。背の部分に記憶合金を埋め込んである既成の表紙に原稿を挟んで、専用の器械で数分加熱すると出来上がる。簡便だが見栄えは良かった。完成原稿二部を持って秋の帰国直前にその店に行った。「その品はもう店に置いていない」と言われて慌てた。帰国予定便も、その「記録」を麗泉夫妻に届けるための会食予定も決まっていた。「今さら」と焦った。別の文房具店を一、二店探したがない。最後は製造元に行くしかないか、と考えて製造元を調べるため最初の店に戻った。店員の売り子は「ない」の一点張りだったが、管理者級の上長が「倉庫を見てみる」と言ってくれた。助かった。返品前の数点が残っていた。それを売ってくれると言う。あわてた三時間だったが、小一時間で「記録」は出来上がった。その三日後、一時帰国の途に着いた。帰国時に合わせて開いてくれた高校同期会で披露した。私にとって、手放せない品である。本章末尾にその目次を再掲する。



『書展』の作品を翌2000年の曆に使いたいと言う会社がある」と思いがけない話がスピーチクラブの仲間から飛び込んできたのは六月半ばだった。作品の写真を持ってこの会社を訪ね、営業部長に会った。希望を確認して、作品の写真を預けて作品の選定を依頼した。「記録」とは別の、しかし予定外の素晴らしい思いができると嬉しかった。麗泉も喜び、乗り気になってくれた。ぜひ実現させたかった。先方が選んだ作品は七点、嬉しいことに私の作品も含まれていた。選んだ麗泉の作品は撮影のために日本から送り返してもらうことになった。どんな曆になるかと期待が高まった。作品発送直前にこの話が土壇場でつぶれた。「社の商品に直結しない」との社長判断、との説明だった。残念だったが仕方がない。話を持ってきた友人も残念がって別の客を探してくれたが実現しなかった。「こうなったら自費でも」と二人の気持ちはエスカレートし、結局手製の「[2000年記念私製曆](#)」が完成するのは暮れ近くだった。限定の数部を作成し、東京とウィーン双方で一年を過ごした。今も手元にある。この曆は電子編集にしたので何人かの知人にはEメールで贈った。展示会発案の猪川さんにもお礼をかねて贈ったらすごく喜んでくれた。

「書展」は大きなインパクトを私に残した。多くの職員（勿論外国人）の間に「小西は書家」との虚像を作ってしまったのである。以降、ハイキングクラブの仲間等からの作品所望が続いて随分恥じ入った。が、個人レベルでの日本文化紹介には有意義だったと自己評価している。三年経った今でも所望されたりする。が、「書展」前ほどまめに筆を手にしていないので仕上げるのに時間がかかる。

「書展」とは直接関係ないが、年賀状について書く。ここ数年、賀状に手書きの筆文字を入れるパターンが続いている。書を始めてからである。最初の頃の字は、今見ると恐ろしく恥ずかしい。よくもこんな字をばらまいたものだ、と赤面する。二字が多い。「書展」作品の素になった「日新」を書いたのは前年1998年だった。ウィーンに来てから書いた字は、「春風」「知足」「自然」「燦」などその折々の心境を字にしてきた。もちろん創作ではなく臨書である。降って2002年は麗泉作品から「和敬」を拝借し、人生での多くの人との出会いを大切にしたいとの思いを込めた。2003年は、来た道、行く末を思い「去来」の字を選んだ。これからも続けたいと思っている。どんな字が心に浮かぶのだろう。